

[原著論文]

河原操子の日本語教育活動についての一考察

包 賀喜格図¹⁾, 包 阿栄^{1), 2)}

Foreign Languages college of Inner Mongolia University

Hexigetü Bao¹⁾, Arong Bao^{1), 2)}

Abstract

From September 1900 to January 1906, kawaharamisako had taught Chinese people Japanese respectively in the Daido school in Yokohama, Wuben Female School in shanghai, and Yuzheng Female School in Kharatsin Right County Inner Mongolia. Her teaching activities then had achieved a good teaching result. After introducing the Japanese education expansion strategy made by the Toadobunkai, which aimed at China after the Meiji Period, this paper analyzed her educational attitude and Japanese teaching methodology reflected in her teaching activities. Then a rough idea about the background of her educational activities and her teaching methods will hopefully be presented to the readers. The Japanese education expansion strategy made by the Toadobunkai reflects the Japanese Government's intention: to expand their political and economic forces by the aid of educational expansion, especially language education. And kawaharamisako's Japanese teaching activity was just one of them. Therefore her self has carried the features of a supporter and implementer of this policy.

KEY WORDS : kawaharamisako; Japanese education; Toadobunkai; Japanese education expansion strategy; pedagogy;

はじめに

従来の河原操子（以下河原に略す）に関する研究は、「スパイ・間諜論」と「貢献者論」という二つの異質の論調の下で行われてきたのが周知の通りであるが、拙文『河原操子についての一考察』¹⁾（2012年）の中では、当時河原の経験した明治時代の日本の国家主義教育環境とその育った家庭教育環境の角度から、彼女の言動を考察した。その結果として、河原には「国家のために献身する」意志と「教育を尊重、中国と仲良くする」という認識が両方あったことが明らかになった。「国家のために献身する」意志はその入蒙後の戦

争協力活動につながったが、「教育を尊重、中国と仲良くする」という認識は彼女の女子教育者の姿を支えた。一見お互い矛盾するように見える中日友好平和の意識と戦争支持の意識、女子教育者の姿と戦争協力者の姿が河原の身に同時に存在したのが歴史の真実として認められるのではないかという考えは『河原操子についての一考察』の結論であった。

河原が「入蒙の直接理由は、生命を賭けして軍のお手伝いをするためでありましたけれども、結果から申せば、教育の方が私の本当の事業になっております」と、再三スパイ論を反駁して、自分の教育者の身分を強調しているように、その日本国内の横浜大同学校、

1) 内蒙古大学外国語学院
2) 九州共立大学

1) Inner Mongolia University
2) Kyushu Kyoritsu University

中国大陸の上海務本女学堂、内蒙古カラチン右旗毓正女学堂の教育現場での仕事ぶりを細かく見ることによって、河原の在中国の中心的な事業は確かに女子教育にあったと言える。しかし、「女子教育者」、「中日友好平和の意識」の持ち主という結論はあくまで河原個人というレベルにおける考察によって出されたものだと思う。もっと視野を広げて、当時日本の対中国戦略、つまり日本の大陸政策のレベルで河原の教育活動を細かく見たら、対中国教育拡張、文化浸透の傾向が少しずつ見えてくるのではないかと思われる。

本稿は東亜同文会の対中国日本語教育拡張策略を説明した上で、河原の日本語教育活動はこの歴史的背景の中でどのように展開されたのか、その教育態度、教授法、授業以外の教育方法はどうかを分析してみたい。このような河原の日本語教育の歴史的背景とその教育実態の考察によって、河原の明治政府の対中国語教育拡張策略、東亜同文会の対中国日本語教育拡張策略の支持者、実践者の一面が浮かんでくると思う。

1. 河原操子の日本語教育活動の歴史的背景

河原の日本語教育活動はその中国人女性向けの女子教育事業の一環として展開され、1900年9月から（横浜大同学校）から1906年1月（内蒙古カラチン右旗毓正女学堂）まで、五年間ぐらい続いた。この五年間は、当時の中日両国関係にしてみれば、ちょうど日清戦後から辛亥革命までの十数年間の中日両国教育交流の「蜜月期」に包括され、中国人の日本留学ブームと日本政府の日本人教習派遣事業が盛んに行われる時期と重なる。日清戦争に敗れて内外弱体ぶりを露呈した中国にとって、近隣の日本から西洋の文明を摂取し、近代的な人材を養成するのが急務であった。この中に、日本へ行って留学するには日本語の勉強が当然不可欠のことになるが、日本人教習による在中国教育援助活動もどうしても日本語の力が必要とされたのである。要するに、この時期には日本語の重要さが中日両国の有識者に十分に認識され、日本語の中国大陸への進出も本格化される状態になった。河原操子の日本語教育活動の展開された歴史的背景にはこの中日教育交流という積極的な一面があることをまず確認しておくべきだと思う。

河原の日本語教育活動は当時日本語の中国大陸進出の典型的な事例となるが、拙文『河原操子についての一考察』の中にも論じたように、河原の中国赴任、特に入蒙という「壮挙」の裏には、明治政府の侵略性を

もつ大陸政策の方針下で誕生した東亜同文会の力が大きかった。ただ入蒙の段階ではなく、実は河原の女子教育活動、日本語教育活動の裏にも東亜同文会の対中国語教育浸透、教育拡張策略の影響があったのである。日本語教育の角度から考えれば、東亜同文会は当時、日本語教育を中国大陸への教育浸透、教育拡張の一手段として重要視し、利用していた。河原の日本語教育活動が始まる前に、東亜同文会はもう既にその対中国大陸の日本語教育策略を提出し、中国各地において日本語教育活動を開始していたのである。次には、河原の日本語教育活動の一つの背景として、東亜同文会の対中国日本語教育策略とその在中国日本語教育活動を簡単に紹介したい。

東亜同文会の機関誌『東亜時論』第10号（1899年4月25日発行）「時論」コラムに『支那の醒覚と吾人の責務』という文章が掲載された。文章の中に、日清戦争の目的について、一つは中国を覚醒させること、もう一つは「東洋の平和を保つ」ことにあると述べている²⁾。中国を覚醒させるという目的は「此事や実に甲午戦役の大打撃に懲創せしに因るとせば、則ち支那を醒覚せしめたる者は乃ちわが日本にして、亦以て甲午戦役の賜と謂はざるべからず」³⁾、「夫れ支那は醒覚せり、甲午戦役の目的の一半は成功せり」⁴⁾と、目的の達成を言っている。これに対して、「東洋の平和を保つ」という目的は列強の中国分割の勢いによって失敗の境地に陥っていると示している。

中国への勢力進出において、西方列強に圧倒される情勢の中、日本はどう対応すべきなのかについて、「分割は支那の禍なり、覚醒は支那の幸なり、其禍を救ふて其保全を図ること、固より吾人の実務なりと雖も、其幸を誘ひて保全を助くること、亦まさに吾人の実務ならざらんや。」⁵⁾「今日吾人の責務は、支那人をして其陳腐の思想を去らしめ、此に新鮮なる智識を與ふるより急なるはなし。」⁶⁾と呼びかけている。この文章は「支那人の疾は近世の學術に通ぜず、当今の時務を知らず、文明の利器を運用する能はざるに在り」⁷⁾と指摘しながら、教育事業、新聞雑誌及訳書、交通往来という三つの面から、中国への「誘掖啓発」の策を述べている。

その教育事業の部分には三つの注意すべきことを提示している。

第一、「先ず支那各要地例へば上海杭州漢口天津広州福州等の開港場に、我国人自ら日本語学校を建設し新進俊秀の子弟を教ゆべし。そして我国人の力能く更に力を伸ばすに足らば、進んで其内地の要所にも亦建

設すべし。教育の事たる固より語学に止るべからずと雖も、今日支那人の憂とする所は、新たなる近世の學術を講ずるの津梁を得ざるに在り、其津梁を得んと欲せば、欧米各国及日本の語を学び其書に通するの外あらず。そして日本語の学び易く、読み易きは、彼支那人の自ら知れる所が故に、彼に新智識を與へんと欲すれば、先づ語学校より始めざるを得ず。」⁸⁾

第二、「直接に我国人の手を以て語学校を設くるは、固より甚だ善しと雖も、力亦及ばざる所在り、且つ内部の要地の如きは、支那人自ら設くるを便とすることなきに非ず。故に支那の有志者にして語学校を設けんと欲するものあらば宜く之を誘導賛成し、其教師を我国より聘せしむへし、是れ蓋し力を勞すること少くして功を収むること却って多からん。」⁹⁾

第三、「支那の学生にして資力あらん者は、必ずしも其墳墓の地に於いて教育するを須みす、且つ其深く専門の學術を修めんと欲するに在りては、必ずや之を我国に留学せしめざるべからず。百聞は一見しかず、従令専門の学を修むる者に非すと雖も、留学の益は語を学び書に通するの外、当世の時務に通じ、文明の利器を親く知るに於いて決して鮮からざるなり。」¹⁰⁾

三点の中に全部日本語の力の重要性を強調している。東亜同文会の対中国教育事業の中に日本語が大事な手段とされていることは明らかになっている。多くの学者は日清戦争の目的は「東洋の平和を保つ」ではなく、日本勢力の朝鮮半島や中国大陸への拡張進出にあると見ているのと同じように、東亜同文会のこの日本語教育拡張戦略も全部平和的な意図から構想されているわけではない。東亜同文会の在中国教育活動の侵略性については、蔡数道(2009)¹¹⁾の研究によって明らかになっているが、日本語が中国大陸に広く使われ、普及されることは、日本教育、日本文化の中国社会への定着を意味するから、中国における日本文化の浸透と拡張は精神面から日本の中国における勢力の伸張と利益の確保を支えているとの考えは東亜同文会の本当の企みだったと言えよう。

以上見てきたように、東亜同文会はその成立直後、いち早く機関誌に日本語教育の中国大陸への拡張策を表明している。ただ戦略の制定だけではなく、この拡張策の発表前後、東亜同文会の対中国日本語教育活動はもう既に盛んに実施されるようになった。紙面の都合でその設立した日本語学校の詳細を一つ一つ説明できないが、ここでそれらの学校名を並べるだけで、東亜同文会は如何に日本語教育の大陸への進出に力を入れていたかわかってくると思う。その中国に設立した

代表的な日本語学校は福州東文学堂(1898年)、南京同文学院(1900年)、東亜同文学院(上海、1901年)、北京東文学社(1901年)がある。朝鮮にも城津学堂(1899年10月)と平壤日語学校(1899年10月)を作った。内モンゴルカラチン右旗における毓正女子学堂は河原の力が不可欠であったということから考えれば、河原の毓正女子学堂の日本語教育も間接的に東亜同文会の影響下に誕生したものと言えるだろう。

東亜同文会の在中国大陸の日本語教育活動以外に、1895年から始まった台湾での日本語教育をもこの視野に入れて考えれば、河原の日本語教育活動の開始される前、日本の海外への、特に中国大陸への日本語教育拡張の風潮は既に形成されていたと言える。この平和的な清末の中日教育交流と侵略的な日本の大陸政策下の日本語教育拡張戦略という背景の中に、河原の日本語教育活動が登場された。次は、河原の日本語教育活動の実態を見てみよう。

II. 河原操子の日本語教育活動の実態

河原の日本語教育活動の実態については、本稿では彼女の日本語教育における教育態度、授業中の教授法、授業以外の教育方法などの面から説明したい。

1. 河原操子の教育態度について

河原の日本語教育はその回想録の記載によれば、よい効果を収めたと評価できる。この異民族間の言語教育の効果が現れる一つの条件として、教える教師側と学ぶ学生側との間の信頼関係の構築が非常に大事な作業として求められる。河原のようなはじめて異国の土地を踏んだ、お互いに言語不通の学生を前にした教師の場合は、この信頼関係を築く能力が一層必要とされるのである。河原は父親から受けた「日中親善」の意志の下でその教育活動を展開したのである。

日清戦後、日本人の中国に対する蔑視がエスカレートしていたが、河原は中国に対して嫌な思いを抱くことはなかった。自分の考えが他人と違うということについて、「この日清戦争から受けた感銘は、私の心を一層深く支那に結びつけてくれたようでありました。みんなで卒業後の理想を語り合うような時なども、大抵の人は本校に残りたいとか、英語を勉強したいとか言っておりましたが、私一人だけは、支那語を勉強するつもりだと言って、みんなに笑われたり怪しまれたりしていました。(東京女高師の時の話—筆者)」¹²⁾と述べている。横浜大同学校の時も、「実をいうと、私

は支那人を導くとか教えるとか言うよりも、支那について勉強したい心で一杯でした」¹³⁾という中国に対する尊重の意を表している。「支那へ渡るために先ず支那語を覚えておきたいと思って」¹⁴⁾、大同学校の教頭鐘先生について中国語を習い始めた。河原操子は着々と中国大陸での教育事業の準備をしていた。ここからは彼女の中国を尊重する、中国人女子教育に真剣に対応しようという教育態度がうかがわれる。

上海務本女学堂の時の一例であるが、「私は唱歌が下手で困ります。どうぞこれから毎日放課後に教えてください」と生徒から頼まれた時、河原は「この生徒の平正無我なる態度は好感を覚えたるを以て、早速希望を容れて翌日より放課後に指導することとした」¹⁵⁾。こんな熱心さで、「彼等は今や全然我を信頼し、我が行ふことはすべて正しきものと信じる」¹⁶⁾とまで学生との信頼関係が築かれた。内モンゴルカラチン右旗の毓正女学堂の場合も同じ態度であったが、帰国後その教え子たちからの手紙からもわかるように、恩師として生徒たちに尊敬されている。河原のこの相手国への尊重の意志と真面目な教育態度は日本語教育の好結果を生みだす大事な前提条件として認識されるべきだと思う。

2. 河原操子の日本語教育の教授法について

河原の日本語教育の教育態度を見たらうで、次はどんな教授法を取っていたのかについて見てみたい。普通教授法を分析するためには、当時の教材や実際の教育手段、教育方法などの現場の記載が必要となるが、河原の日本語教育の場合はこのような史料はあまり多く残されていないので、その教授法の実態を詳しく説明するのが難しい。当時の教育状況を把握するには河原本人の回想録——『蒙古の土産』と『青春を蒙古に捧げて』という文章の中の断片的な記述に頼るしかないのが現状である。

前章で述べたように、河原の日本語教育活動は日本国内の中国人留学生向けの日本語教育事業の発展と海外への日本語教育の拡張という背景の中で行われたのである。日本語教育の海外への拡張と言ったら、日清戦後の植民地台湾における日本語教育がその最初の且つ代表的なものだと思われるが、台湾領有によって日本は大規模な異民族に対する日本語教育の模索を始めた。教授法の模索ももちろんこの中の一大事業として重視されていたが、いわゆる伊澤修二の対訳法から山口喜一郎を代表とする直接法への転換もこの台湾領有初期に実現された。

周知のように、台湾での日本語教育が発足したのは1895年のことで、その初期の主導者は台湾植民地の最初の学務部部長の伊澤修二であった。伊澤修二は初期の台湾教育の方針を定め、植民地の教育基礎を築き上げた人物として知られているが、日本語教育においては、彼は「徹底した日本語による同化政策」の主張者と実践者でもあった。伊澤修二の主張していた日本語教育の教授法は対訳法で、「当時は台湾語（中国語）を使って徹底的な対訳教授法を取っていた」¹⁷⁾という。母語を異にする異民族の人に日本語を教えるのに対訳法を取るためには、まず教師がその学生の母語を習得しなければならない。日本人教師が学生の母語で日本語を教えることになるので、「学習者の日本語は教師の中国語学習の進歩の歩幅を越えることができない。しかも、教師は中国語の学習にのみ追われて、教授法上の研究をすることも、授業の準備を充分にすることもできない」¹⁸⁾と、いろいろな対訳法の不足が現れていた。この中で山口喜一郎を代表とする日本語教授者の提唱した直接法が注目されるようになったのである。

「直接法」とは、簡単に言えば、学習者の母語を用いない外国語教授方法のことを指すが、その日本語教育への導入は1898年9月に成立された国語教授研究会の参加者によって実現されたのである。国語教授研究会の発起人である橋本武は1898年に台北国語学校の図書館からフランス人フランソワ・グアンの『言語教授及び研究法』を発見し、すぐにこのグアン式教授法を同僚に紹介した。これを契機に対訳法に疑問をもっていた山口喜一郎などの教員たちが1899年4月から国語学校付属学校で直接法の実地研究を行った。この直接法による日本語教授は効果を収めたため、公学校の国語読本の編集をしていた大矢透と杉山文吾が直接法に基づく『台湾教科書用国民読本』を作り、1901年から1903年にかけて発行された¹⁹⁾。台湾総督府の学務課も1900年にグアン教授法の採用にあたって『ゴアン氏言語教授法案』と『台湾公学校国語教授法要旨』を頒布し、公学校の教師を集めて講習会を開いたりしていた。『台湾公学校国語教授法要旨』は、直接法に切り替えられてからの教授方針、教授方法、教材作成基準などを一括して説明し、日本語教授者の進む道を示した。この台湾で盛んに唱えられた日本語教育の直接法は山口喜一郎などの教授者の修正を経てだんだん日本の植民地教育理念にあうような整った形になり、そして後の日本の植民地朝鮮半島と満州、占領地の中国華北地方においても採用され続けていった。この広い範囲、長い時間に採用されることから直接法の強

い影響力が感じられるであろう。

台湾の日本語教育によって重視されるようになった直接法はその影響力から考えれば、当然日本国内の日本語教育教授者にも影響を与えたと思える。河原が横浜大同学校の教壇に立ち、中国人女子留学生に日本語を教え始めたのは1900年9月であるから、ちょうど台湾日本語教育の直接法が提唱され、確立された直後の時期にあたる。だから、『台湾公学校国語教授法要旨』と山口喜一郎の直接法論説が当時同じ外国人向けの日本語教育を携る河原の教授法参考になる可能性は十分にあると思う。では、河原の日本語教育の教授法はどんなものだったのであろうか。

横浜大同学校の時の教育状況について、『蒙古土産』の中には、ただ河原の中国人に対する態度と中国人教育の心構えなどを記述しているだけで、教材や教授法に関する内容がほとんど見られない。これに対して、『青春を蒙古に捧げて』の中には、「(学生たちは)喜んで私を迎えてくれましたし、私もそのつもりで、言葉は不自由ながら、お互いに温かい気持ちを感じ合うことができました。私の受持ちは、日本語で、小学校の読本を使って教えました」²⁰⁾と述べている。ここからははっきりとわかるのは河原の担当していた授業が日本語だったことと日本語の授業の教材は当時日本の小学校の読本を使っていたことである。「言葉は不自由ながら」というのが河原と学生間の言葉の通じない状態を意味するが、日本の小学校の読本を教材にしたということは教材の内容は全部日本語で書かれていることを意味する。この状況の中で、河原の日本語教育は直接法を選ぶほかはないであろう。彼女は「生徒に対して十分に親切ならんが為には、自ら支那語を話すことの必要なるを思ひ、(中略)放課後鐘氏に北京官話を学びたり。」²¹⁾というのもこういう教育状況に応じるための自然な行動だと言えるだろう。

上海務本女学堂の場合、河原の担任学科は日本語、日本文、算術、唱歌、図画であった。河原の回想には日本語の授業の教材についての説明はなかったが、当時言語の不通に困った状態について、「言葉がよく通じないのには、ほとんど弱ってしまいました。御承知の通り、支那は各省各地で発音が違ふために、生徒同士の間で言葉が通じないことも決して珍しくありません。日本語を教えるのに、どうしてもわからないところは、漢文を使ったり絵を描いたりして説明を補っておりました。」²²⁾と言っている。言語不通の状態というのが横浜大同学校の時と同じであるが、河原は日本語を使って日本語の文法と言葉を教えている、また生

徒がどうしてもわからない所があったら、中国の古典の漢文と絵画の力で補っていることがこの回想からわかる。言語不通の状況から河原はやはり直接法の教授法を取ったのである。このまま半年続けた結果、「支那人は語学の天才と言われているだけあって、半年もたつとかなり日本語が喋れるようになり、私も上海語がいくらかわかってきましたので、言葉の不通からくる授業上の困難は、漸くにして取り除かれて参りました。」²³⁾

内モンゴルカラチン右旗毓正女学堂における日本語教育の教え方について、河原は次のように言っている。「女学堂の学科のうち、私は、日文、日本語ばかりでなく、算術・図画・体操・唱歌・家政・編物といふ風に、いろんな授業をもっておりました。最初の間日本語を教えるのに、先づ私が日本語で喋りまして、それを北京語に譯し、王妃や侍女が更にそれを蒙古語に譯し直して生徒に伝へるといふ、大へん回りくどい方法をとっていましたが、生徒の進歩は案外に早く、そのうち私が直接に日本語で「私の筆」といへば「ミニービール」と蒙古語で答へ、「テルネーイェンタイ」と蒙古語でいへば、「あの方の硯」と日本語で答えるようになって参りました。」²⁴⁾

学堂最初の時、河原は中国語とモンゴル語を媒介にして学生たちに日本語を教えていたことがここに記されている。授業中の河原の日本語を中国語に訳してからまたモンゴル語に訳して生徒たちに伝えているところから考えれば、学堂初期の生徒たちの中国語の力がかなり低かったと判断してもいいだろう。河原についてはモンゴル語を習ったことのある記録がないが、カラチン王府での二、三年間の生活の中で少し覚えたとしても、モンゴル語を使って日本語の文法や言葉の説明をするまでの力はまずないはずだと思う。だから、学生たちの日本語の力がある程度高くなってからは、やはり日本語を主な授業用語として日本語の知識を教えていたに違いない。カラチン地方には毓正女学堂の設立前は女子教育が全無の状態であったから、学堂初期の女子生徒たちがモンゴル語と中国語の読み書きがほとんどできなかったことは推測できるが、毓正女学堂の学科の中に、漢文、蒙文、日文という三種類の言語の読み書きの同時学習が設けられていることから見れば、生徒たちの中国語とモンゴル語の能力の向上も時間の問題であろう。簡単なモンゴル語で授業をしていることは前の回想文にも書かれているが、上海の時のように漢文を使って生徒たちと交流することもよくあったであろう。毓正女学堂における河原の日本語教育

は日本語を中心にした、モンゴル語と中国語の補助的な役割を果たした三言語の教育形態を取っていたと考えられる。直接法はやはり教授法の中心的な位置を占めていたと判断してもいいだろう。

3. 河原操子の授業以外の日本語教育方法

日本語の授業として、河原は横浜大同学校では「日本語」、上海務本女学堂では「日本語、日本文」、毓正女学堂では「日文、日語」を担当していた。名前がそれぞれ違うけれども、同じ日本語の授業であることは間違いない。横浜大同学校の時の日本語教育効果については関係記録がないが、上海務本女学堂と毓正女学堂の場合は、それぞれ「半年の後には相当日本語に熟達し」²⁵⁾と「日本語の如きはよく記憶し、短時日の間に巧みに会話し得るに至れり」²⁶⁾のように、教育効果のことを述べている。特にカラチンから日本に帰った河原に寄せた毓正女学堂の生徒たちの手紙や毓正女学堂の日本語の試験問題と生徒たちの答えなどを見たら、その生徒たちの日本語成績の上達ぶりに驚嘆することになる。ここに一つの疑問が浮かんでくるが、全部言語不通の状態からスタートした河原の日本語教育は、短い年月の中に、ただこの「日文」「日語」のような日本語の授業の力だけでこのような成績を収めることは可能でしょうか。本稿の考えでは、日本語の授業以外の河原担当の学科の勉強と生活の場の勉強が大きな役割を果たしたのではないかと思う。

上海務本女学堂においては、河原の担当した日本語以外の科目は算術、唱歌、図画があり、毓正女学堂においては、算術、図画、唱歌、体操、編物、家政があった。河原はこれらの授業の時にも日本語を用いて説明することが多かったと思う。日本語の文法や言葉などの説明はもちろんこれらの授業の学習内容にはならないが、河原との日本語の交流の間に学生は言葉のことを自然に覚えたといってもむりもないであろう。正確に言えば、河原の日本語教育は日本語の授業だけにとどまっていない、外の科目の勉強もある意味では日本語の練習になったと言えるだろう。こう考えれば、河原の日本語教育の授業時間数も言葉の種類と量も全体的に高いレベルに達していたと言える。このレベルの日本語教育を受けているからこそ、生徒たちがいい成績を取ったのも当たり前だっただろう。

日本語以外の科目の勉強だけではなく、河原は生活の場の日本語の学習にも力を入れていた。上海務本女学堂の場合は「毎週一度、言語練習のために談話会を開くを例とせり。生徒らは交互に演壇に登りて、満座

の人々を前にし、少しも臆する色なく意見を述べる」²⁷⁾というように、談話会を開いている。毓正女学堂にもこれと似た「同窓談話会」を設けていたが、これも言語練習のためのもので、月に一回開くこととなっていた²⁸⁾。

談話会のほかに、河原は放課後の時間を利用して、生徒たちと交流をすると同時に、日本語の練習をさせていた。「放課後になると、多数の生徒が私の部屋へ集まってまいりまして、私を取り込んで身動きもできない位で、一緒に唱歌を歌ったり、編物を編んだり、楽しい時間を過ごしていましたが、そうした時間にも、「一個洞洞三鍼」など喋っているのが耳に入りますと、早速「一つの目に三つ編む」という風に日本語で言い直させたり、彼女たちとのあらゆる接触の機会を教育の目的に利用することを忘れませんでした。」²⁹⁾このような生活の中の日本語教育は実に巧みなやり方だと思う。毓正女学堂にもこのようなことも多々あったはずであるが、河原はあらゆる機会を生かして生徒たちに日本語を覚えさせようとしていた。

おわりに

以上、河原の日本語教育の展開された歴史的背景とその教育態度、教授法、授業以外の教育方法などを分析してみた。この分析によって、河原の日本語教育の登場する時代的な特徴が明らかになったとともに、その日本語教育の実態もある程度究明されたと思う。河原の「日中親善」という意思の下で真剣な態度で在中國日本語教育事業に尽力したこと、またいい教育効果を収めたことに関しては評価できるが、本稿のおわりにはやはり河原の対中国人女性の女子教育や日本語教育の裏にあった教育浸透と拡張の一面を強調したい。

『河原操子についての一考察』に言ったように、「『国家のため』という意識のもとで、軍の特別任務班への協力や北京公使館への情報連絡などのスパイと言われる行為も、河原にとっては日本国民としての当然のことであった。これだけではなく、教育活動の場合も河原は「国力伸張」の意識が強かった。「蒙古の女子教育をなるべく日本風に発達せしめて、同地方日本化の根拠地たらしめんがため、女学堂に於いては特に日本語と日本文字の教授に力を注ぎ、日本唱歌を歌わせ、日本の紀元節、天長節、地久節を休日たらしめ」と言っているように、内蒙古の「精神上的占領」を図っているのである。これは川島浪速の対内蒙古工作の意図、つまり、「蒙古方面から、何らか一種無形の壇壁を築

き上げて、ロシアの中原侵入の鋒先を防止しなければならない」, 「そこでまず蒙古方面を精神的に占領すること, そして蒙古方面の実力を有する人々を親日主義に誘い込む」ことと本質的には一致している。」³⁰⁾河原は明治政府の中国への教育拡張戦略, 東亜同文会の中国大陸に対する日本語教育拡張戦略の支持者と実践者だと言ってもいいだろう。

- 26) 前掲 『新版 蒙古土産』, P172
- 27) 前掲 『新版 蒙古土産』, P64
- 28) 前掲 『新版 蒙古土産』, P173
- 29) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P140
- 30) 前掲 『河原操子についての一考察』, P61

Received date 2015年1月7日

参考文献

- 1) 包賀喜格図 『河原操子についての一考察』『九州共立大学研究紀要』第3巻第2号, 2013年
- 2) 東亜同文会 『支那の醒覚と吾人の責務』『東亜時論』第10号, 1899年4月25日発行, P 2
- 3) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 2
- 4) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 2
- 5) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 3
- 6) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 4
- 7) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 4
- 8) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 4
- 9) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 4
- 10) 前掲 『支那の醒覚と吾人の責務』, P 4
- 11) 蔡数道 (2009), 「東亜同文会の中国教育事業に関する一考察」『中央大学社会科学研究所年報』第14号
- 12) 一宮操子 (1939) 「青春を蒙古に捧げて」『婦人公論』24巻12号, P132
- 13) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P134
- 14) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P134
- 15) 一宮操子 『新版 蒙古土産』, 日本出版配給株式会社, 1944年1月, P61
- 16) 前掲 『新版 蒙古土産』, P61
- 17) 木村宗男, 『山口喜一郎の日本語教授法について——対訳法から直接法へ』『10周年記念論文集』, 早稲田大学語学教育研究所, 1973年3月, P240
- 18) 前掲 『山口喜一郎の日本語教授法について——対訳法から直接法へ』, P244
- 19) 安達信裕, 『統治初期の台湾での同化教育について——国語教育を中心に』『アジア社会文化研究』(4) 2003年3月, P89
- 20) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P134
- 21) 前掲 『新版 蒙古土産』, P46
- 22) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P138
- 23) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P138
- 24) 前掲 「青春を蒙古に捧げて」, P150
- 25) 前掲 『新版 蒙古土産』, P57